

目的 嗜好は日常の食経験を通じて徐々に形成されると考えられる。一方、性格は、遺伝と環境の相互作用により形成されると考えられている。嗜好と性格の生活経験を通じて形成されていく側面に視点をあてて両者の相互関係を究めることを目的として本研究を行った。18~19才の女子寮生を対象に味覚、性格および食生活の相互関係について得られた結果を報告する。

方法 味覚テスト：0.5から1.25%の食塩水3組についてペアテストを行った。続いて食塩濃度0.5から1.25%の清汁を調整し、好みの汁を複数選択させた。性格検査：YG性格検査一般用を用いた。食生活状況および意識調査：質問紙法を用いた。

結果 味の好みについての結果から、味の好みをうすい(A)、どちらともいえない(B)、濃い(C)の3グループに類別して、それぞれの性格特性因子得点の平均値と標準偏差の全般的傾向をみるとBグループの平均値はAおよびCグループに比べて低い傾向が見られた。なかでも情緒の安定性と社会的適応性の諸因子には有意差が認められた。以上の結果よりBグループはAおよびCグループより情緒の安定性がよく、社会的適応性も高いと考えられる。なおAグループの食塩濃度識別力は他のグループよりすぐれていた。

寮の食事の味と量についての結果から、味および量に慣れたグループと慣れなかったグループに類別して性格特性因子との関係を検討した結果も合わせて報告する。